

環境概論

持続可能な地域づくり（森の自然エネルギー活用）

日時：平成26年7月27日（日） 13:00～15:00

講師：高野 雅夫（名古屋大学大学院環境学研究科 教授）

概況



「持続可能な地域づくり ～森の自然(じねん)エネルギー～」

名古屋大学大学院環境学研究科教授 高野雅夫先生

成長型社会では限りある地下資源はいつか尽きる。ものはなくならず形を変えて廃棄物となる。人は第2次大戦後60年以上に亘り生態系を壊し続けてきており、持続不可能な状況である。行き詰まらないためには、エネルギー消費量を減らしながら人生の質を高める工夫をし、生態系の中で生きる社会の実現が必要となる。それこそが「千年持続可能な社会」であり、小さな一步一步の積み重ねによって実現可能となる。

日本では100年前から地形を利用した水路式小水力発電所があり現役で活躍している。高野先生の取組んでいる、らせん水車(マイクロ水力発電)による発電で生活できることや、自然エネルギー100%で運営する「すげの里」におけるウッドボイラーを使った給湯・床暖房設備、建物本体の構造、太陽光発電やバイオマスの利用などが紹介された。

間伐材活用の現状は、間伐しても経済的に成立たないため間伐の未実施や間伐材が利用されず殆どが切捨ての状況であり、間伐の実施と間伐材の活用促進には行政の支援が必要不可欠である。間伐材活用促進の例として、地元経済も活性化でき

る「木の駅プロジェクト」(豊田市)や間伐材ボイラーを活用した「かみいしづ温泉」(大垣市)の事例紹介がされた。

山が守られないと街も守られない。豊田市では「豊田市100年の森構想」が策定された。しかし、いなかには集落の存続が難しく、一方で都市は若い人が将来に希望を持たず、20代の3割は田舎への移住願望がある。豊田市では「空き家情報バンク」などの取組がされ、中山間地住民と都市住民の新たなコミュニティが芽生えている。最近では、2011年3月の東日本大震災を契機に東京圏から西日本への転出が増加しており、第2期の移住ブーム(逆都市化)になる可能性が十分ありえる。

高野先生の取組の「千年持続学校」は、地域ぐるみでIターンを迎え入れ、100万円程の資金でエコ&おしゃれな里山暮らしができる住まいと仕事場を作り、半農多業で自然療法のある暮らしをして、地域の中で高等教育機会を作り出すことがねらいであり、実際の家づくりの様子が紹介された。

田舎集落の維持には若い人の受入が必要であり、トラブルなく移住できるかどうかは、地元の人との互いのコミュニケーションの充実と理解が重要なポイントとなる。